特42
9
444

養老
清經
宋如
邑小斷
小袖買我

五

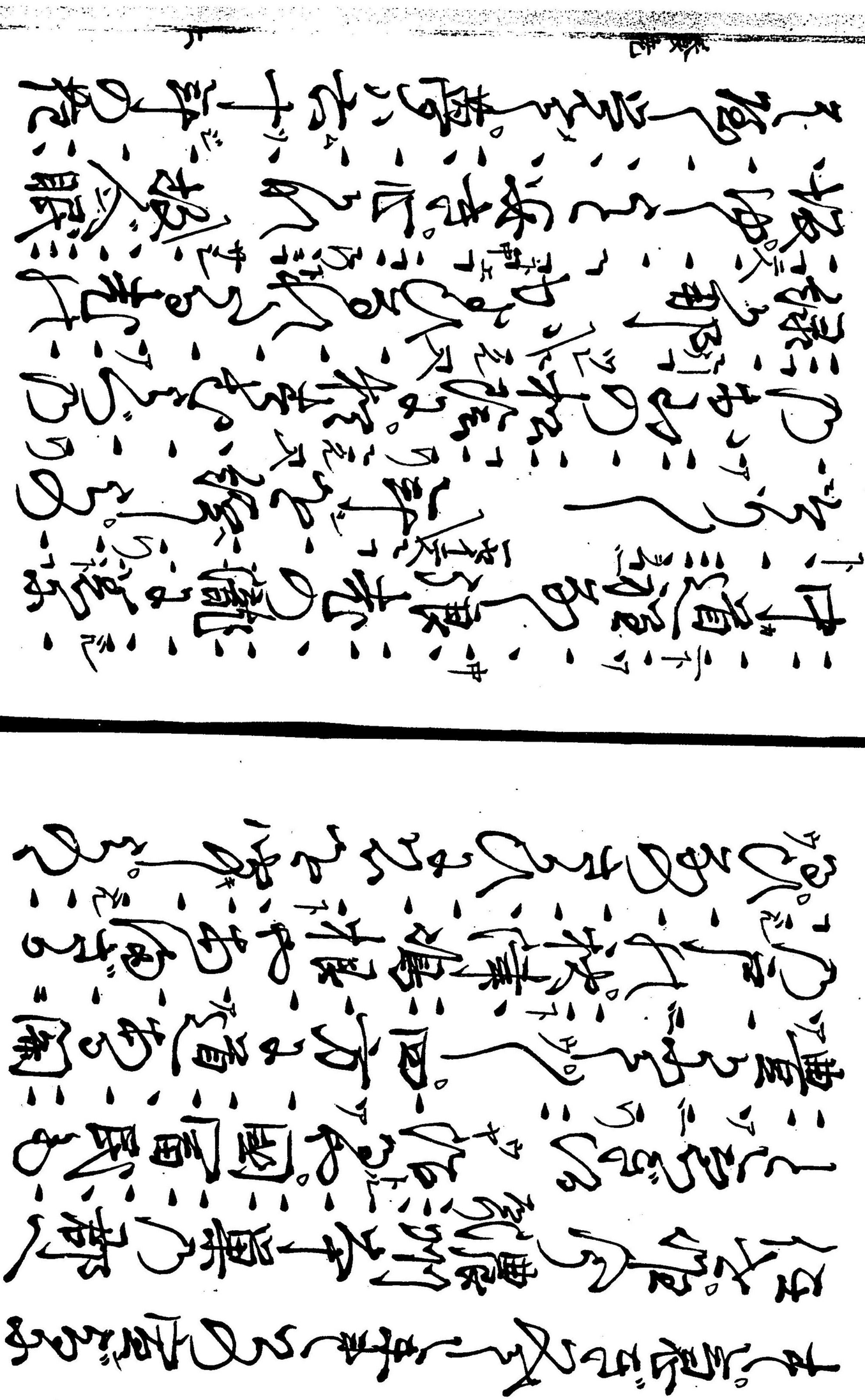
255
55

明治
30 1 24
内交

[illegible]

[illegible]

[illegible]



よる心ハ夢の后の月を備さ分ハ
板橋の霜ハ白頭の雪を
積まじ。老をゆ[illegible]の滝の
の水や心を清むる奥山の
保谷の古[illegible]のため[illegible]流れ
と波ハ[illegible]ぞ長生

の家よりそ[illegible]老ぬ門を
ある[illegible]見ると年ふる山ぞ
らの[illegible]せ[illegible]ぬ[illegible]と松陰の岩
野の水も薬ふる老をのべた
るとろろそ高行き[illegible]ぬ
しまれ[illegible]いふ見る

老べは言ぬべきなれ　汝方
のやうなるは　ワキ　もらとは　シテ　ゆ及べる親やうのもの
さ　ワキ　思ひ　シテ　思ひて　新なれ去るまは
へ　思ひ帝　ドよるの勅使して
あるべきよ　シテ　書籍や雲竹

ハルカ　遥かなりまの我が大君たちと
とのりと賜きまの思ひ今
形るやの書籍さよ思ひて我
なれ民　タミ　作へ　ワキ　扱もらの寺
巣の郡よりぎある泉出る
すと奏聞まで思ぎ今年れ

その宣旨を任じ給ひ勅使を
下したまふ所なりぬ。そこに浪老といふ翁
そめ。謂て毒中べし（シテカ）　さ
ばかりなる所に屏ゐすゑ居ぬ。
ばかりなる人新酒をとり出でて
ごとくに盃を。ある時に沒の作

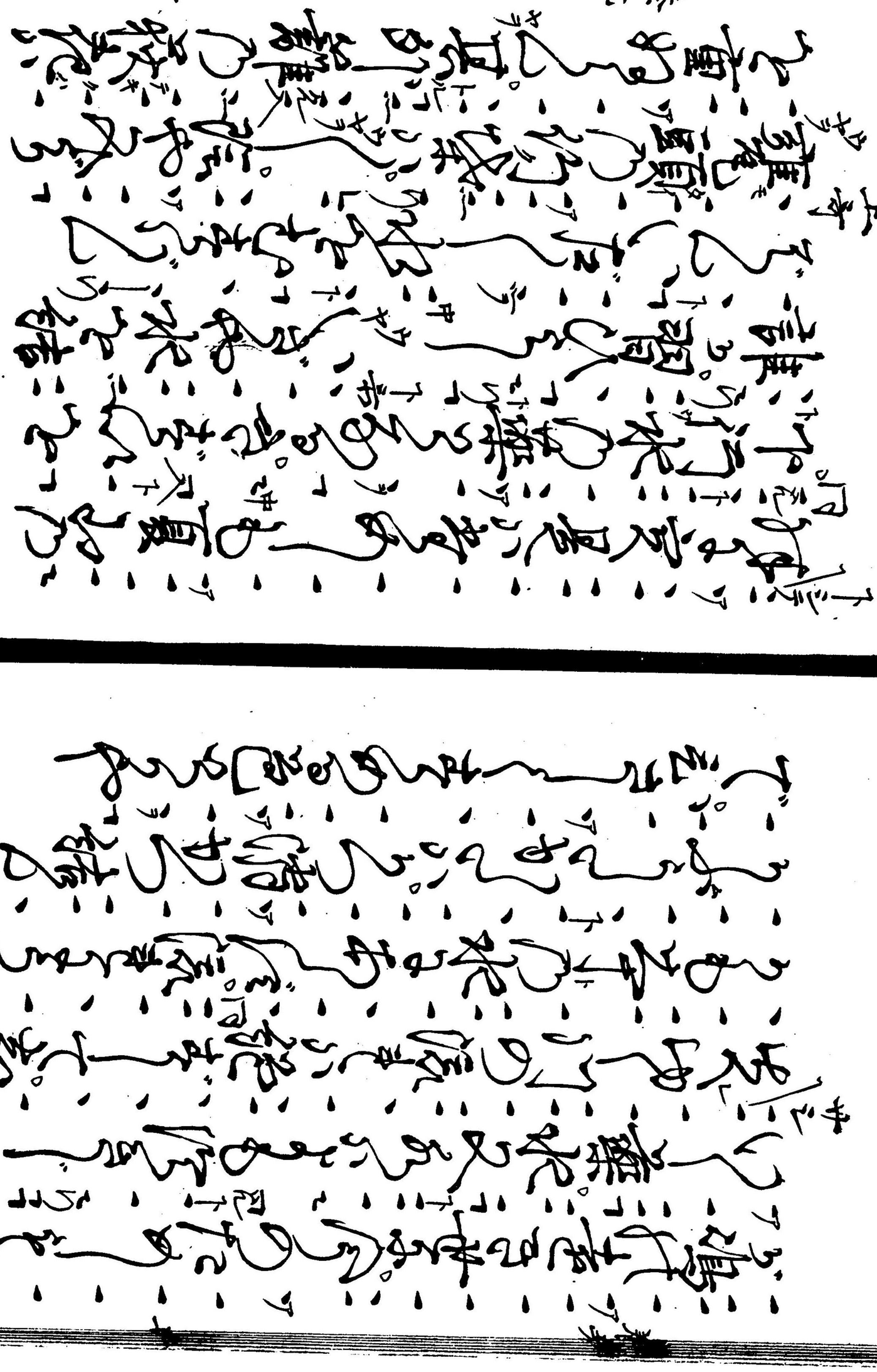
のまとりて。泉水を何と名付て
とりめぬ。香（ヨノツネ）常なる心もまぎ
しそつるもたまたまり（ミヤビ）ちあ
ごとに家の業は泉水もかやま
あるまとりて。やがて家遊所
汲運びぬ。毎日見とあるまま

ば　看心よりいたらふ（ヤガテ）　ツ　あきみの
老ゝも長き水乃　ヘ　ぬ　ば　ら　め
病も起らかぬ　ト　ツ　ル　ば　よる　ね　寝ざる
もさびしかぬ　ヘ　ト　ヲ　ラ　む心わま
し水乃絶ぎも老ゝ　ア　ト　ニ　ヲ　ラ　ム　ヲ　キ　ヲ　ス　ル　ヲ　ス　ル　ヲ　ス　ル

すきまの井戸底まで濃る
きぐれ石の間。岩角にゐて苔
のむせ
めしも
の水
なり

上京の人を
元入
老のだらに浪りぐ。すし

て、盛りの人の身の。楽とあるべ行
也も。古寿命を。畫すぐる。泉
ぐめでたかりける。宮やむ水の
あるべ。すめる。代ぐりて流の末
の秋まぐ。豊よまちめる。結
さよ。宮や寿ぐも。



林葉の秋を、汲みもやらん。晉の七賢、
菊を。劉伯倫ら、酒を。飲び、但は水を
殘さじ。めくめくと薬を君
のためにと、曲水を流すあり。
むかしの石ふたりてとうとくもも
手を出さじ。他もまづ、那

て月を。ながめ、あれて月を、
ゆり宮殿の
まよ。みぬ城の奥の水をて
行きの人ら。浪ひ、載祖が菊
の水。まづる露の殘ひを。他徳
を受しまり。七百歳を。ふるもも
薬のあと。宮殿を。安や薬と

菊の露 其浪人の露のまふ
なみをとゝのへやあの花ちれ 云
花さき 煙の草木迄 花さき
宝なる理り 其わけと云あぐる
昼雨露のめぐらふ 浪
ひゆる 花乃父母なる雨露の

翁も養はれて 洗水よあを衣
の袖ひぢて 結ぶ手れ 花さく
ゆるゝの野 宝も薬と思ふ
より 花乃法も若水と云る法
姉 かり 宝 鞠
きりけらづ 君ぎ 物 君

よ養国き巻そてうから うれ
翁もかまて古めぐ ひろき海ら
ぎとたりやめば 勅使もか
さ孫う感涙ぞ 寺指
静 上寺門
よ年迄とすと しもあく
孫ばかりぎやあ 天より来う

かやきう。龍の御着も寄て
音楽国を発 中 是作うと
と思れぞ 有難や治
する庶代の為 ひろて。此河
寸ぐやう五 五月の
めがきて 長の光り。昼八何

[illegible]
[illegible]水の清泉をすも春
[illegible]
[illegible]
[illegible]

よせてうつるぞかれ市上当
もいさもはよきこの井の
山吹の井の水流てそ
恋ひたりしさする時代の君を
みるに水あるよ新
くべしてこよ君をあふ世

代てそ幾久しさも生きやも
つきせず君よひまく玉水の
しきを時はも濁ぬ流津
の水のうらの波の逆もぐ
もすき序代当る
の世ちふ人ありき

清經

清經ハ重ノ塩路ノ浦ニ身投シ給ヒ
塩路の浦浪に重よいざや海人
是を見て左中將清經の君を仕
へ申。淺間の三郎と申者
は。扨も賴もなりは清經ハ過ず

築紫に軍を討すべき行。都へ
迎へぬ道さぞの雑兵の
みかくんずりかと思ひきるに
前の國柳が浦の沖すて更
行方の便を投宮
くぬ行るに又船中を見て

きぶ御形見ふ髪のかたちを
しるべ置れるは何ひとつ命
きかり御道と指ぬ都へ
ぶりは沖猛き。鄙のまに
ニにツニうャミ
よ初くて。高くる古御の
ミ仁ヨトンーンアソーニニンニラーニ
昔のまよりくて。とかれる秋

イコト、、
答てそれ時間ふる様子なほ
ソニイトーソ　ハイ　ニ
る袖の分のそてを思ひ
ニイトーソ　ニイ　ハ　ニ
ぽり〳〵
コトニ
しを思ひ程よ是
いそれ都より高きはいふ業門
申はつ高き法津の三昧
サブ
ぐまりてゐる行中点へ

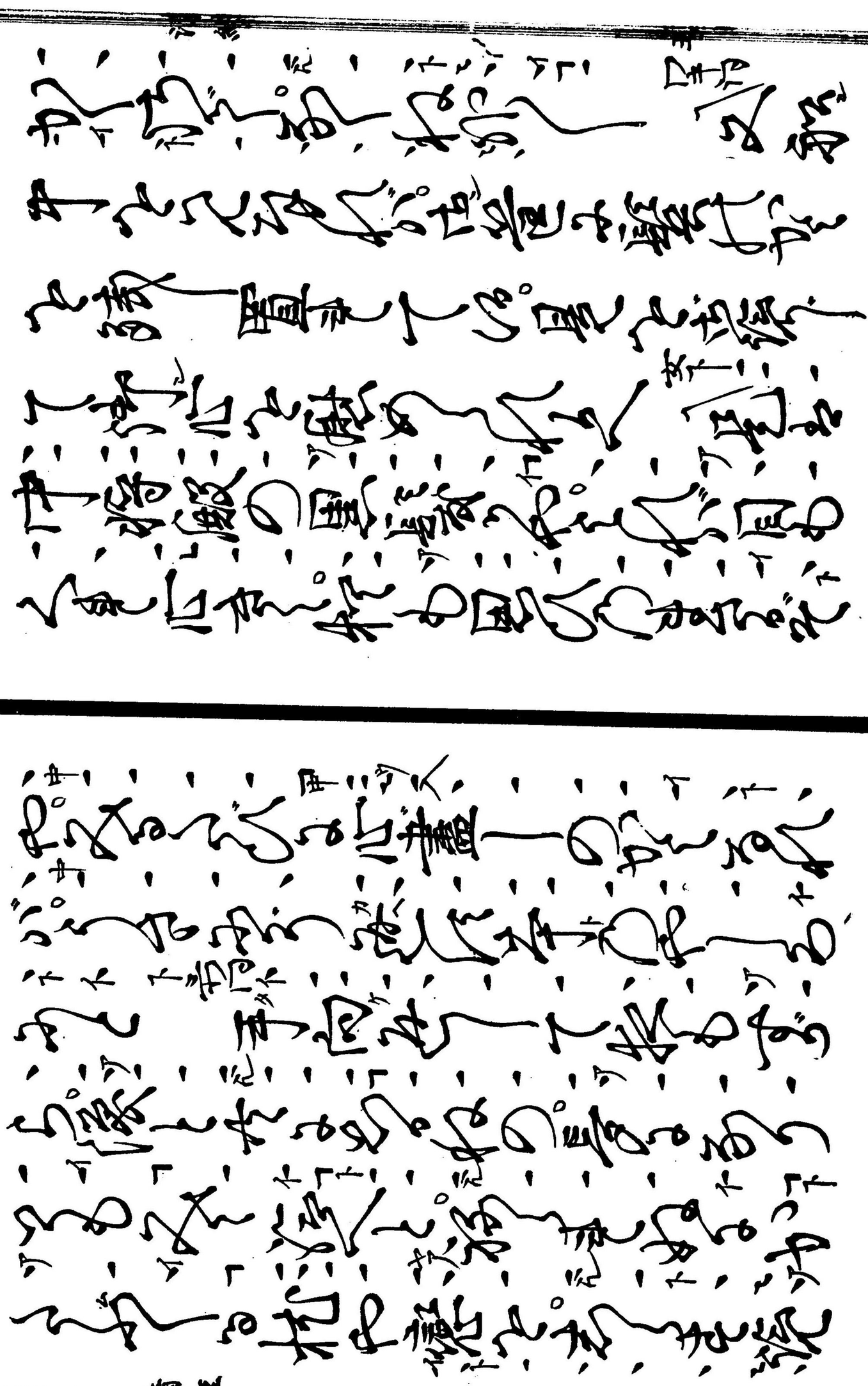
仏法津の三昧と申が人をも
知方へ参り拝ぶ
仏の為の古法使ひ者ぐ
もば面目もあり古使ひ参り
作　面目もなき古使ひとて罷
ぢ通せ参り者ら　いや法通世

まてもぢ屋なくは　乙女　思ふ　業
清の軍みもちつゞるまとそて
岡ぎるふ　ワキ　ちんばるる　業
清の軍みもちつゞちぢ屋みくは
ひゝぐ。清經心を思ひやる。都
へい迷ひぬる道芝の。雜兵の

手ふかゝるべきと思ひまして
るか。豐前の國柳ヶ浦の沖な
して。更ゆ月の夜ぶすり月
と投宅成佛なくは　女色　仁
多と。ぎ宣成佛なると
ハヤ　ア
やゝめ。やゝめ。詞まも

しらまゆみ　春の海の霞ぬる
清なぶ　かぜ　花思ふべきふぜい
まことに　ものとなる
ぎぼうしゅ　ぐ　ぶり
流つるうねとうれ　宮殿
其うひ　ぬる　世と　なる　松　ぬ
しきれ　何　ぶ　もそれ　れ　り

きる世中　人　月　なる
受　狐　宿　人　垣　の　蔦
風　色　なる　ぬ　ぶ　ぬ
ぬ　の　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬ　ぬ



イコニ シテサシ

訓 百人の夢の部あり

て現と成る眼裏に塵なりて三

界を忘ぼ心頭を空みして一

法人やうとなん世も

長門とうもまよろ

ひいつも沼ある雲水のゆも。

和 今

訓 故郷なたどる心

中ヨリ 甲

ひとりねる窓

ヲ入 ト ラ ト

き人をとしより夢てふ物

イ 入 エ

ハ頼をうめてきいるふへ

ハ 清涼らそまりて作へ 文

人 氷

思ふやすどろむ枕よみ治

ふかぎる清經ゆめ覺て
ぴ〜身をなげ給へるゲ夢か
らぐいづくゆべきぞ夢か
まうも古海とぷくそ給ふぞ者
（イト中ア）孤き去なづく命とまで我
と身をまてぢを給ふ古夕ふ

ぷつをうまるかねとなまき
（イカ）ばこ（ヨ）ネ（ト）ば恨めうは（シテエ）き様よ命を
もうを文給ぷ我も恨ま者明
（ヨ）ぷようう嘯（ヲク）ー曽ぷ行
（文上）しみ迷ぢを給ふ
こ　いや
そよ曽と迷ぷ思るあまり

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
しきの袋のとびなる心にて
しのかたきまぶ うちすぎて
みたりとのやうにうみとぢも
をとりし黒髪をあらばかもむ
べき形見ぞ をとりと心
はなぐるや慰めてのみ置まれ

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、
ぞもぞられば思ふの乱まぢかく わ
きて送りしひもあり置き
へたりとあるの根に秋も捨な
し命のくるまよりとち
かたたる 形見ぞつまく
ろ髪の 上方 ふるとをちくよい

[illegible]

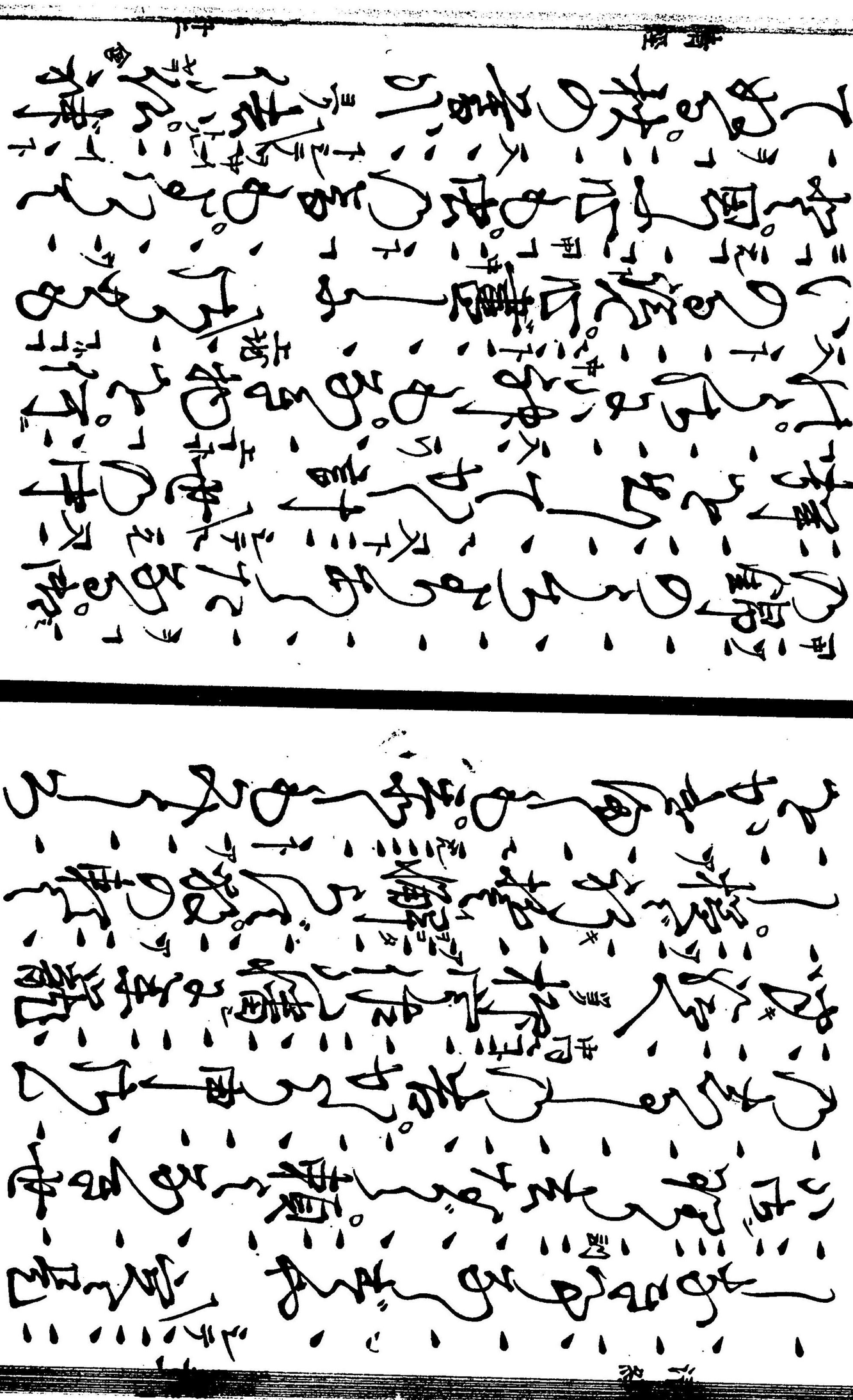
[illegible]

[illegible]

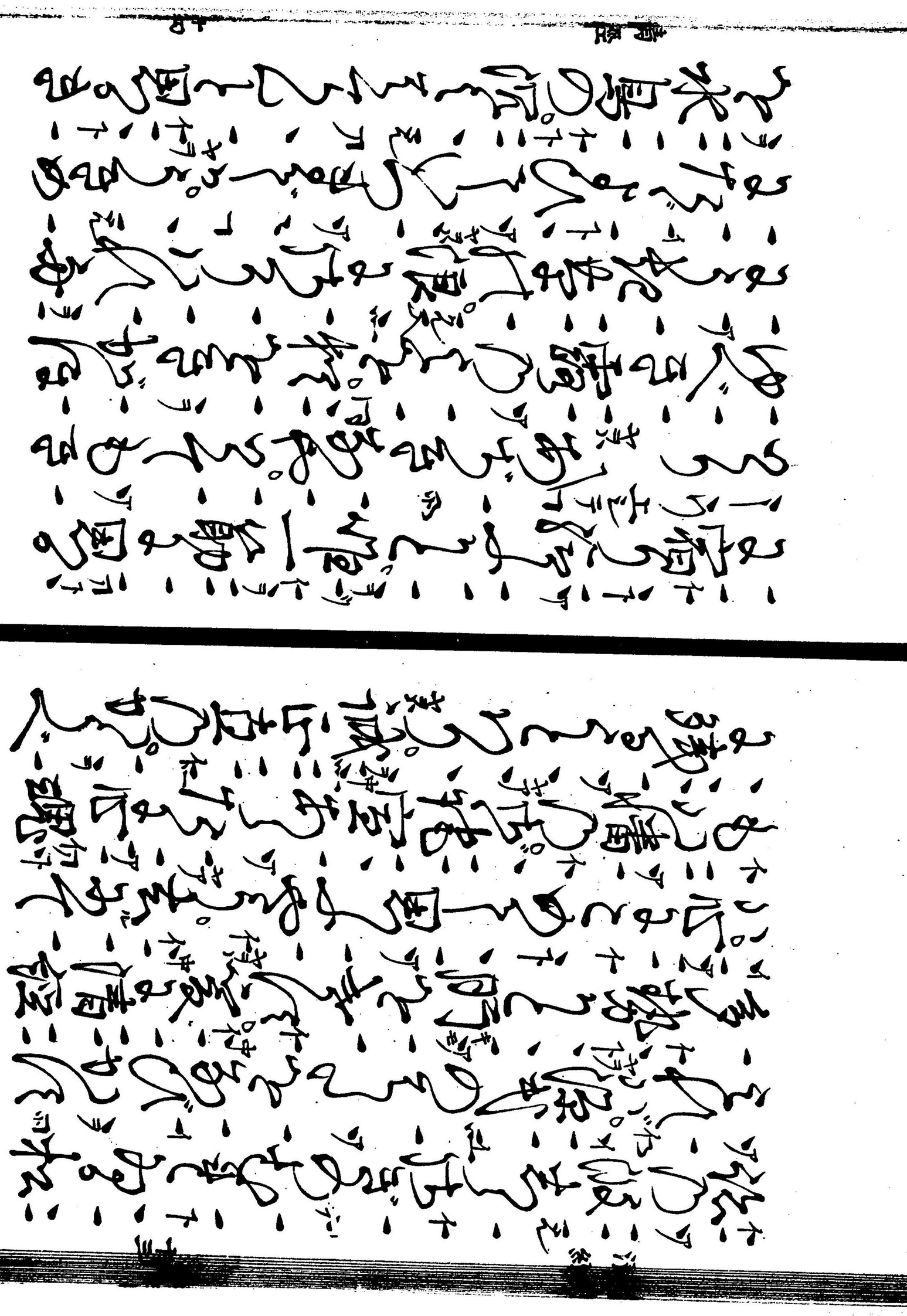
門國柳と云ふ所より
やがて可もなくをえたる浦ばかりの
其の柳陰にかりそめに宮居
をしたりと聞
ばかりなれば作り
構へなしたる清水べしとて神酒
七足そなへ金銀種々の物

中略

則なほ離れ
よりたゆめ成べし
文上小樵
夫中ぶ和
れども分ちなる似
るもの多
れどもさばかるまず
君ますます
門出
ともなびして徒
ぬ
ぬ
ぬ



三寶も捨果ぬよと心ぼそく
て。門に。乳をとゝ
まひ力をれ
ゝて見よ。車はそぐと
第三。幸ゐ。
かゝる。宮。
もゝふと。
長門の国へも故
毎年。



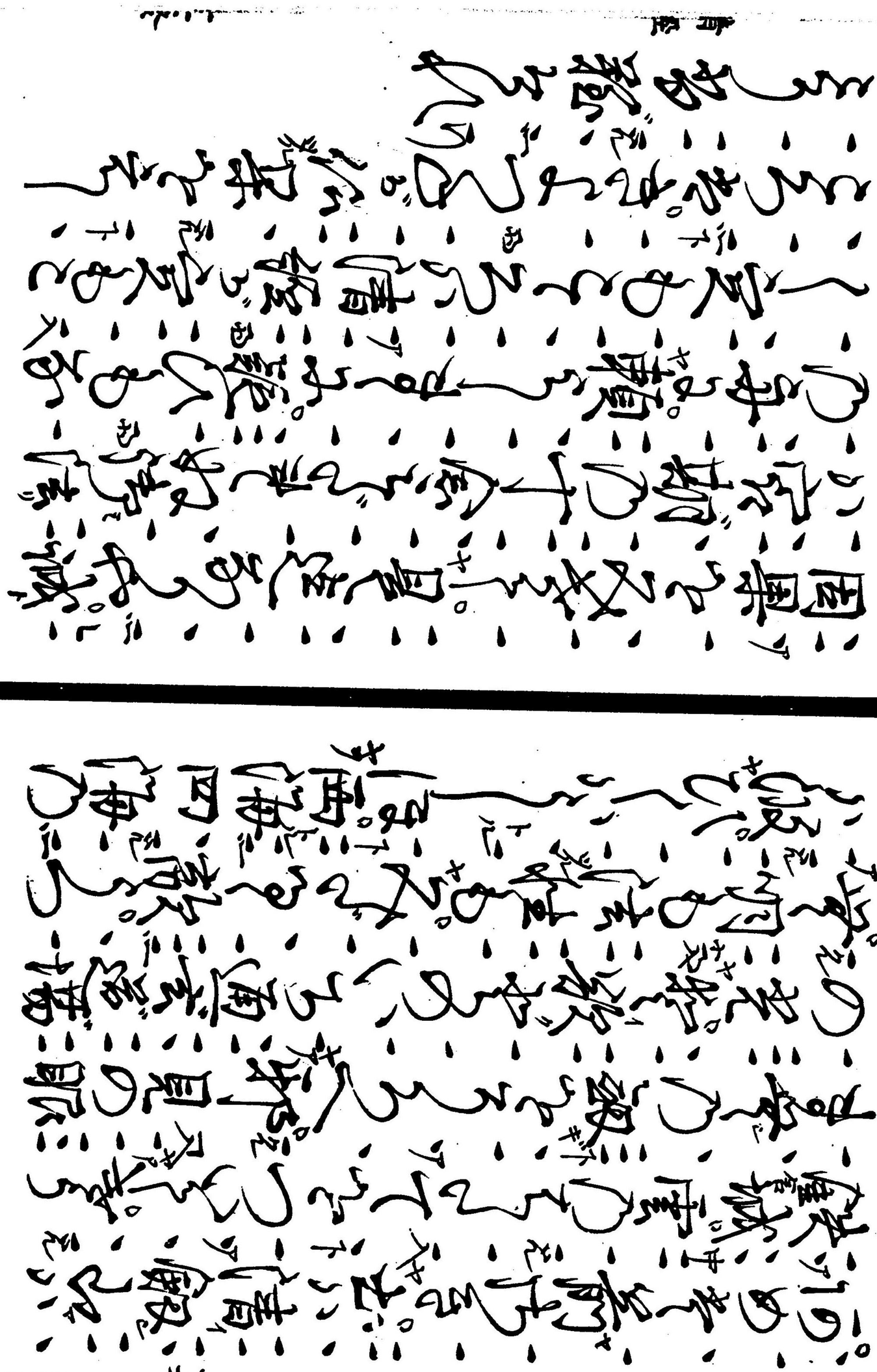
星のよいとぐ岩代のまつをと
あらぬ暁の月みつ潮くまを松ふ
ゆ松のへいりを立あぐるよ
ゆりやうでぬきし音もを
ゆうふきを角やうを
うふ朗詠かゆ行末城

かぐをゆ絲よりもいつらあるあるの
ゆ袖ぬいりてまぬを心
盡しよ世そても桐ぞう
黄男る続さぐやそめよ人
ふる粒べとやまんよ
人行ちみるめをかりの根

[illegible]

[illegible]

[illegible]



宋　女

異国見る諸國一見の僧まそれは
我洪福寺都よりひろ洛陽
の寺社ゆ物うまるまれぐさめぐり
て作。又是より南都よ来ぶ
やと思るゆ　ヨクしたきやよひの十日

俳句。花の都を旅立ちて、
をとめて苔のつめの
工寺
新もも
沼
よ。我も都鳥ぐるまを
ゆ
ゆ
ゆ

きづかひて、四方の神の寶
前よ。腹たつる燈もゝをかき
る歌ゝゝ。芸の情も深秋の
月。朧ゝと秋の末れまとゝく
きび神の清心みも出くゝ
あゝやおぼまゝ安月はる

花の陰ゆく宮めぐり
あらの数ゝ。つもる梅
の雪れ庭ゝ。色へゝむき
れの花をたゝまゝる藤の
あぐまてを生ゝ。記れ

情

いろふ見まる女性よ尋ゆべき字

乃作シ　こゝの字みてゝら何
ぞみるいぞ　ヒキ　ぞやきがこれ
狂ひげなたるとり杖ゝ重ねて
木をうへ陰ふみ不審ゝ祝うへ
侍シテ　侍ゝ當社ゝ祝ひ　ヒキ　ゝ来清乃
人みて古ゝ　ゝ　ゝ　

あるじとたのもしと頼まれ辰
ぬ。氏人(ウジウド)より手てらへ〜水けぬ。
まめぐるほどゆく。程あるかや
うなれども。なほまだ。
のはちすもの。人(ト)のしるしをう
ゑ。まもなく。とのゐ出(ヲ)ぬ。

ちとせうよりはつ付(キ)や去ぬべきとぞ
しるしもゆくべ。人のうら
らひ去ぎるまの。法師のれと
今もみる。法ぞ成ぬ。
あり。さ(ヒ)ぬ。悲萬行の日の
二、二、二、二、二、二、二、二、二、二、
歌。三位の少(ドカ)長岡みて。五

宣作識の月の光りは生日の
さとくるもの　陰軽れ
つゝ　ます勢作りそめるなる
ゝも。まず國成ばの神ずと
思ひあるなる男ひ治るそ
らかゝの基初め。治まる法
ハ久方れのめりこれ入ばりみぐう
ずる。花ひ入を音弱りて。佛
法流布のあをねそ。昔ハ天
雑島ゆみして。妙法義経とと
紀法ふ。今ん高ばと廣き
ゝゝ大明神と顕き世ゆ位

なるべし。乾坤のたゝずまひも。三笠の
山をぢ陰ぜよ。扨、美堤樹の末
陰なる。藤俣て松もも。感ぬ
花を書白み長閑陰小夏ぬの
浮出の春ぬ。松ゝめや
しゝふ中ぬ。糠沢の池ゝて隠

あるゝ池のゝ陰ぜゝ狂て
作ゝ　及ぶる石池ゝ
古教ゝ　山方へ出へ
ゝゝ糠澤の池ゝ
みな細のゝへ洲池の島
洲綾ゝ

まゐ（ワキ）　安きを問ひ仏事を
ばなほ申べし　依て（シテ）と心ざ
て旦向申べき　見ハもと
家女と申しし人沈池より方をお
ぎ空しく所にまりぬ　ちまぶあ
めの帝は待（シテ）奇よ（ツレ）ぢもこぶ

ぶ（ツレ）なをかくをさるちの（ツレ）池（ツレ）
の底もとうるぞうの　きも
侍る奇の心（ワキ）ちば去ら見れ
ぬりぐや　宮（ワキ）ちくに山奇ハ夏及
ふまとやうみんぶ　安古物侍りく
昔天（アメ）女帝（ド）の古（ド）時より　独り代来

女ものがたりねりとい君よ仕へ
うへうへふかくあり。初は歌(エイ)を淺(サ)
うへばうまうばほどあり。虎心を
まうしとぞ。ばかりあるべうえうう
らうしまうさ。池は方をるぎ
宮うへ成あり

(ワキ)宮(ミヤ)

きうへびいは。帝あられを思
ひ。洛嵯峨沢なる御寺(キ)なるへ(ベル)

女(ツレ)

宮女が死(ミ)を歌を歌流あまもの
(ワキ)
ちもさびうまうへかう
(女)
翡翠(イ)のかもざ(ビン)の髪
(ワキ)
ひうへ美眉(ビ)墨(ズミ)
(女)
なんくるの唇(ビル)

[illegible]

[illegible]

[illegible]

倦はてつまれ幻のごとくめのまへ
ぬのなるよりよりは流れぞ城なる
すべて
有難や妙なる法
とうるなるまでも心の水とぞ和を
ちぐ〳〵共うとへあぶら
よ心なる池の蓮の蓋
なるとひらくとも
よ
不思議やなお池の行ん顕
まさかよ安女と世なる人やる
傀儡まぐいすへ安女まぐる
ふとあふまさまり佛果なる
めでたうます勢
牛よりも人

人間に生れあり。何能ひもなく
ひらくへ水の底あるうらうらぐ
や乃至女中国出すぐ
清成佛倉
てや人間りなるひとつとも就女
ぐぎらく我も変成男子る

至家女と出る。なるそ。まつも
可ふぐらの南のちなる
至。昌そ南方安楽世
界。生まるとも。願も
宮やいすへ人ふるの教代
とへる。神と居るの道まぐふ

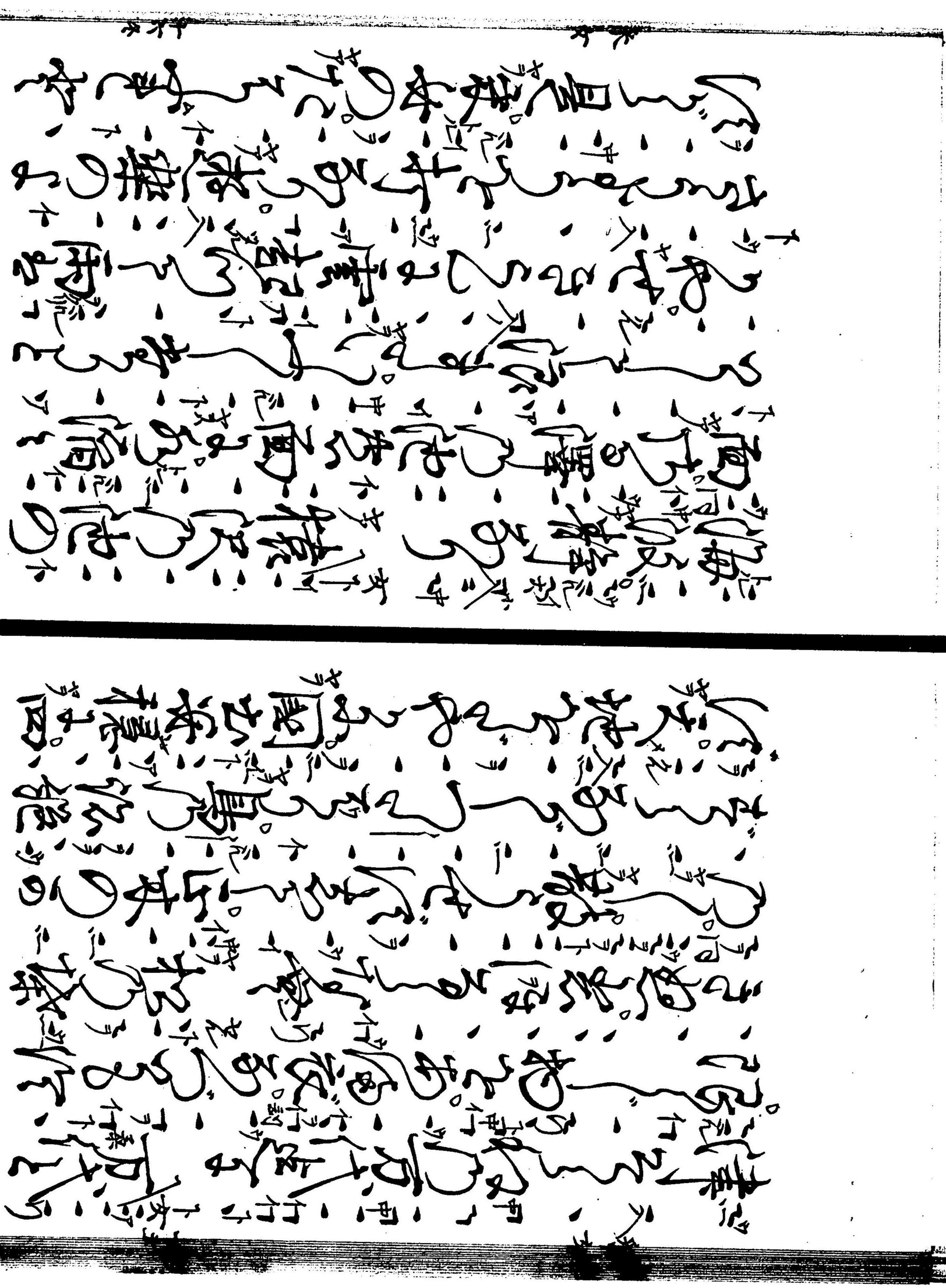
國家を守る撰びとられ後き
ば君ゐ仕へぐ其志明ぐ表れ
ぬ事ヲふ。ひとり家女のそ
ゐ衣ぬ。ひとり淡ゐ心をとぐ記
君島ゐ仕へ女ちまぐ世
ぐゐ其名をひろめ情ちゐ

こちり定ぐ紫式部ゐあるけれ
ぬ世もつ。ひとりぐ考ぐひ出ぬ
ひとり名中ゐ城の大君。勅を随ゐ
ひとり葛ゐ
ぬ。ちのぐ代。ぬ志ぐ波
も清。ひとも松ひとあひとそ
ゐ清。ひとも松ひとあひとそ
ゐ考ぐ考ぐ代。松

もゝ
ぢ
ぶ
ぶ
ぶ

ねめの衣れ家そくて。大宮人の
小忘衣揚うをかざしてあるより
げもらまし。いろ詳出あやを
物に嵯歌の曲相をそらへ
あとひるぐ。て。袖楽妹
徒るる美女の衣ぐ。なくあるを

かき忘まめれ出水の宴の有
ろ。御出給ひ。賞ぐ。日りを
月の月の金。ぶまとるぎ。
うひ良るるり嶽高をとる
逍楽の月なみ月よるを
れるで。雲竹のうらぎ。天



おぼまおよ。讃伝寺の因縁を
る物をよく見て絵へ合と
てゝ又泊よ。へ泊よりまいりまるこの
度よへりまきて

通ふ所

昼ハ瀬の山里ふ一夏を送
る僧まく作。家よいづくも紅
ぞ女性一人。毎日こゝ流水を
持てきたりぬ。今日も来りて
ゝいで。いゝ成去ぞとゝいを寄が

やと思ふは　ひろふ流ずもの
きぬの　句てぬ袖ぐやて
き　是ハ市京野のあらふ
信ふみてハ　扱もハ衛の山ぶ
貴き人の古いりは福ぶいつも
このてつまず　をてて来りは

ぶ見もなまいてぞやと出ぶは
いふ中ぶすと社まりてて
いぶも来まる人ぶ見まとの
らのうぶ　御物語へ　ひ
ろふとのふ　仕ろ
こうまもあ　ぶ

へさかりぬ。軍は似るものなし
地
もろこの高ぶ
寄べのい
女
ねのとれるを
人もかれ
地上
ほの柿。みのべのちぐり
女
宮
の梅
菌の
桃
花のそるある
桜あきれば。
女
のうるあ
枝もの

ぬ
みすてゞ
かうもの
きくのうへ
瀧
きもの花
ちばなの
とのうら
ぬ。
鶯
ぬ。
花
ちる
人ぞ
ゝを
ちる
名
ゝ
そゝ
や

ソノ一ニ曰ク

ソノ三

ものゞ名を小野といふ。

薄（すすき）ハ人ノ住ル市ノ原ニ生ベキ事ニ

非ス。然ルニ、源ノ人ノ住ル古僧ノ

甲ニ元ニ乙ニ元ニ丙ニ元ニ

ものゝ名ハ小野ト云ハ

ものゝ名ハ小野ト云ハ

ものゝ名ハ小野ト云ハ

人ノ住ル野ニ

もあるめ、、、ぶ聖ふ、を
高おひ者りとあり。これたの
小所乃寺也。佛ハ新しく可も多
くを人ハれ女性ハ野小所乃
面白と思ふ程ハ。俗市ハ不聖ま
ゆきぞ。まち乃路と思ふ。

と思ふ作 上吉
とハ草ハ合ふ。ち
ぢ。ぢ。ぢ。

同じくも戒ちづき法師僧
シテ
いやゆるすまず戒さづき法師
女
聞きやべし。そも何ゆたまふ法
僧
といふ。何かる法
よ。あへで。其若慧をさきと
シテ
やみるべるだるかるきふ

ぱ分一人佛道ぶわづ思ぱ
もきがうへのちよ夜のすねう
うきめを三瀬ぱよ流ぞそ
おが古僧ぱづき法へるひも
ニト
ぎすぱそやの何り給へや古僧
ニト
工寺ちキョウ
ちも其分ぱ迷ふもう

戒力をひろげば、ぶどう仏道をば、
ぢうぶつ作。法を戒とき法へ、
文上 人の心を法雲の秋ふくまで、
心の月。出る古僧よりはんや、
落葉をはらはれば、つめど
わきもわるなり。ぢうぶつ文 ぢうぶつ。

ねうぶつ仏法を加、文上 ちもひいみ
ひろきをみるとちふ、
ちがひ煩悩の大
ちうをるすぢ、
ぢうぶつ。
文上 ぢうぶつ法やは法とちう、
ぢうぶつ。ちうをるでも

シテ　ーーー

思ふ事　城の内の里より馬か
あまぐ　君と思へばかちはだ
　　笠みちの
　　扇て涼
　　月は
　　ちて雲
　　雨の夜
　　さて
　　暗うば
　　抽
　　多の浮せて
　　ちやの杖
　　月は
　　抽
　　ちちちちち

　　同
　　ぬ思ひと
　　星
　　分
　　涙
　　ゆふぐ
　　ぬ思ふ
　　ふとも
　　ちやうちやう
　　ぬ時ぶるも
　　月雨ふ
　　ちやうちやう
　　ぬ思ふ
　　ふとも
　　ちと

なるぬ。思ひのれ。月きまつ
ぬ。月をばまたぬ。ぬまをばま
たぐ。ぬ。ぬごやわ。あつき者
ぬ。ぬ。かず。れ。ぬ。ぬ。ぬ。
秋ぬめなぐ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
鐘もなぐ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
やうふ心を。畫。ぬ。ぬ。ぬ。
揚ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
九ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。
ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。ぬ。

こぐ舟
蓑もぬぎ
ごろもの
むすびきの
らんをあ
もやきも

ゆがさ打ゐぶ
きつれ
色ごのみね
ゆびきまは
ゆがやぶ
れ名ゐの結

夜の。夜伽きつ
ひ。飲酒はいとふ。
をもいもい
きもとぶ
ぶとぶ
野の小町もお

ひきつろ
ぶちづきな
ますめなでた
一会のちふ
ぶつを減して
少将も。共よ伝道場

元イ一下ハ二ヲ

祝ふ今ハ

小袖曾我

栄ヲ多

命ヲ一下ハ惜ざと一元ヲ三ト一ア一冨士の

一一一下ハ一記ヲ一ト一シテ

もそ野ヲ分ふよ　是も曾

我の子孫成ては。扨も頼朝

卿の情を御出る間物も是

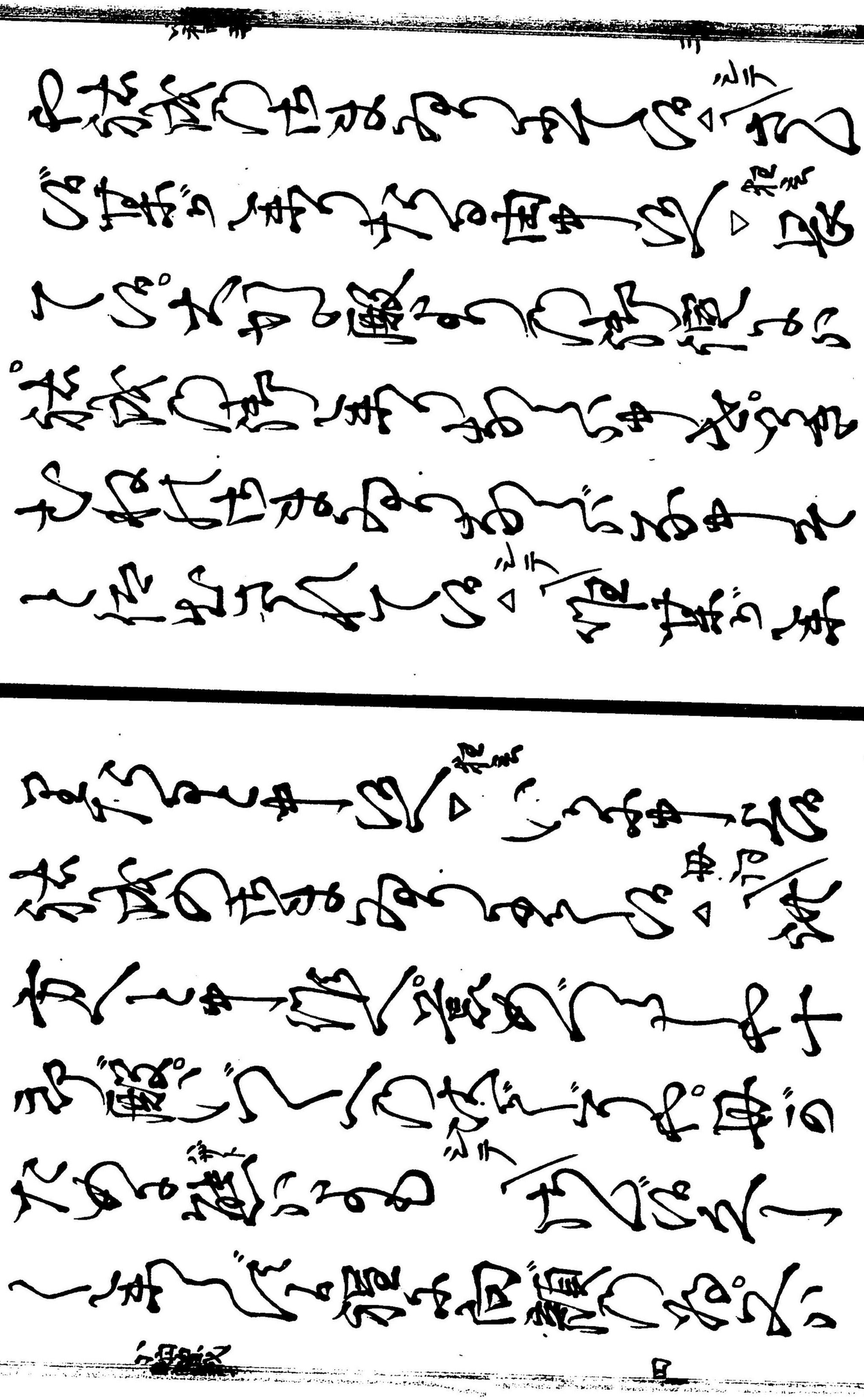
出ぬ。是成時宗ハ母ヲ

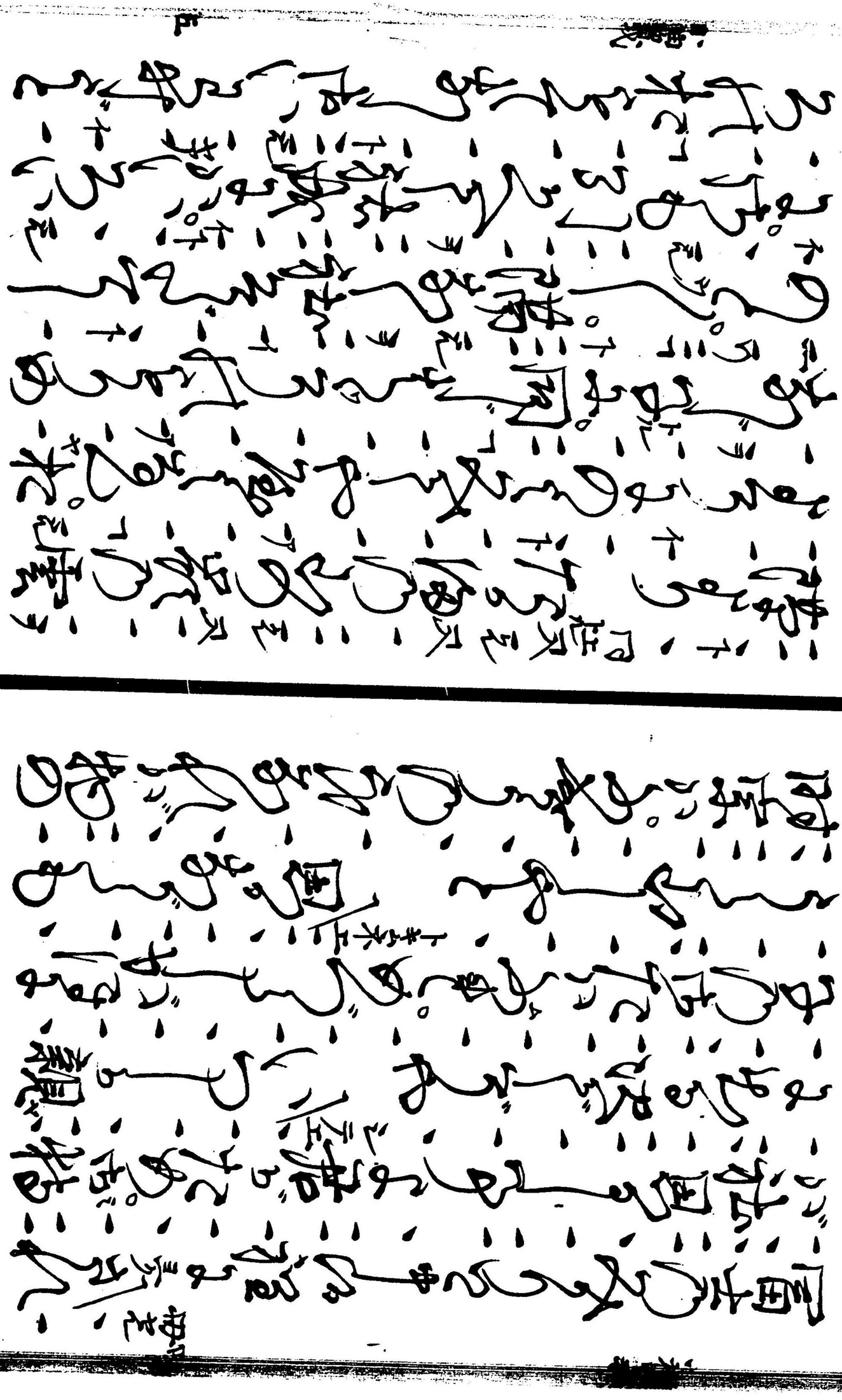
者れ勅當りみては狂ふ中ぶを
しぶきとぶ物よ荒出ぞやと
さし
海は時しも荒い凝久回寄
ぢつき寄れ[ヨセバ]ずの雪。五月[ザミダレ]雨
雲よりすぐ[アト]ぎぐ中ぶりとすぐや
むりぶりきく廣の星月夜

鎌倉殿[ギヨ]の法師[アジヤ]達[シテエ]宮ぐ
ひ[ヒ]ぶき[ブキ]ぶ[ブ]ぶ[ブ]ぶ[ブ

ばやとすらん。松の梢べなまぎれ
うちもしるる人まれぬ大内山
ひかりもさすがに隠てうまるべ
みぐ梓弓。やどるべ
ば。鹿ずりを。拡張と射るべ
ぞをみぐ根よあぢばやと思

ひ立ぬる梢宿たるべ君の御
とゞめずるべ
ぬ。ぬ。ぬ。
見しよ。暫待べ。某まるべ
案内を申べ
案内申べ。





わたさるべき。たとへば時宗ぞ。
なほ[イト]ばかりまちまゐらせ
同じ[イト]ばかりまゐらせ。御たづね[ヤ]あ
しかるべ[ツイ]だて有らうずや。
れば[シテ]
月[名]の十一のぢきごとすでは
おまへ[ヒ]を事[ヒ]ばかりの局

とゝ[名]ゝ中[名]ぢまをいく[トキ]ば某ごと
しぶ[ビ]ぢ[ビ]ぢ[ビ]ぢ

乳母達が仏参りとか
きぐの野の花見とか、こゝ
こゝの聖寺詣りだ
とかいふて、時宗がまつた
るまつそれ中作く
みぎや狂歌八百屋の寺ぬく
ぐるの前百姓寺とあつたな

らぐまいあるを時宗といふ
なるやう今思ふにしらぬ根
の寺は有り箱根とそさ
者ぐれまつぶ母ぐ此家まれ
と中しをきるぐ猫ま勘
者をよぐ見まぐ来

きるハ。牡蠣重てれ助者うゑ伊豆
箱根冨士指現も古隠ぎよ
おとは山はも助者と
ぐとふ去とう又遣ぢと
うくられて忘れとやうも
あき此分うぶ。たうゑ責て

今やとめ。滝几張も松りた
ま。晴多の作ゑ林成
ハ。カ。も去で時家ぐやき
うりたりとうきぢ門
ねきぐ拾かまうゑ

一丹、一一一

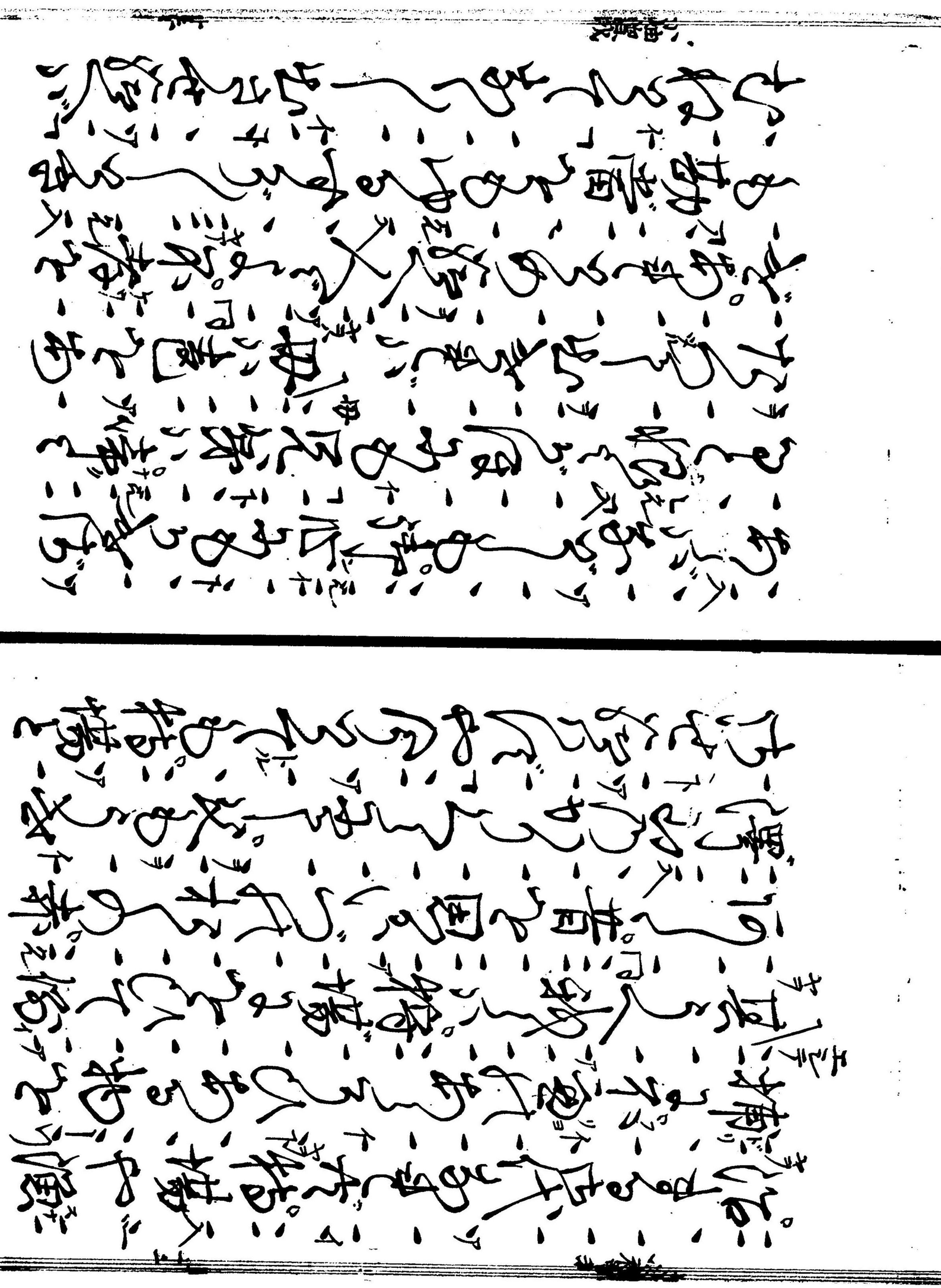
問ふ度に問ひて申すべき
みちをいかにとき（トキ）某はまゐり
はべるべし（シテ）はべるまゐりたべと
よ申さばまづ親のうしろめた
ぶ思ふ隠るべきかよ優り
あるべき問ひて時宗どもを申真
つ（ツ）てみるよ出（ヅ）べき家よ時
宗どもを申さば法師なる侍
勅當（ウ）どもぞ（ヲ）ぞ（ヲ）ぞ（ヲ）法師なる侍
なる　物（モノ）ぞ（ヲ）ぞ（ヲ）法師なる侍
思ひ給へねばぞ（ヲ）やたとひ時宗も
家ぞ（ヲ）ぞ（ヲ）法師なる侍

ゆゑ等もあり。ぢもゆゑ因あ
まぢのまちまち法くはなて拾るうと
かへつ〳〵古き古ちうりひてらそ意
悲の母たち中べきまも引拾よ
時宗を法師なるぬるのぢか
ゆゑ。だちひ伝ま古るゆゑ比

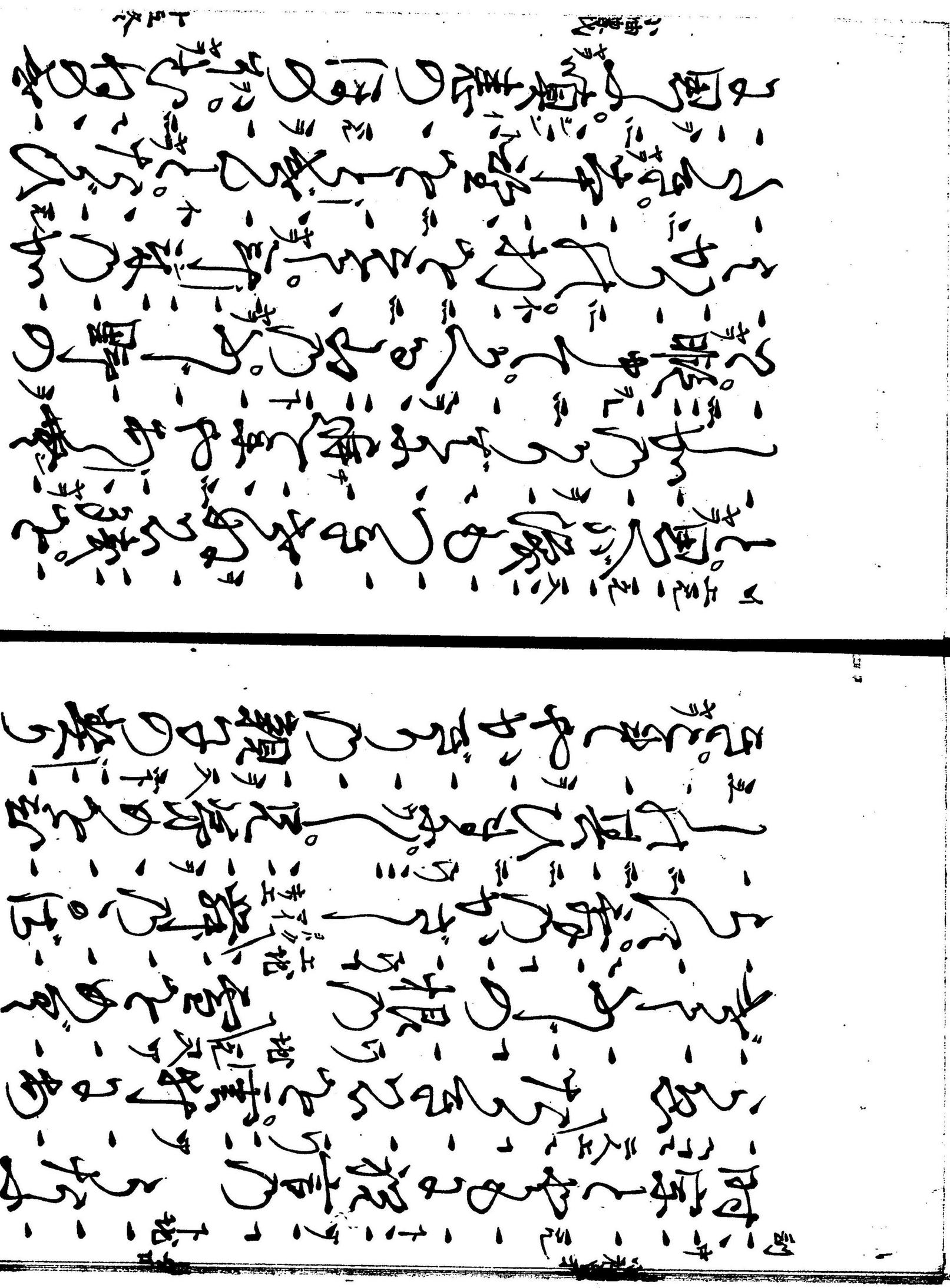
家住りはるも。我〳〵ゆゑ世よか
くまき。おれんよかそゆゑ子
供らそ歌をのゆきんうの比家
ぢ〳〵ぢ法の為ゆゑと同
宿もれらひ時賜まばゆもうま
ぬ墨衣の浦鳴ゆこのぢこね寺

みそ。何とれも、世間ふか
ら。中ごろ、よふとうるゞ
時宗ハ。そこねみる。強ふ。法華
經一部よそ。考へ。ゞ。
仲、毋上れ。現世安穩後生善
所と祈念する。又も毎日ふ。古万

ゞ。念仏ゞ行津。厭ゞ日高を
。。。なゞ他人ゞ。ゞ分ゞ洪
三ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。恩顔ゞ
しゞねゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ
。。。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ
ゞ方ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ。ゞ



兄弟ハ、ハ、ハ、



みりを富士おろしよそふてい
月を清くぐ閑よ。鏡よふるゝ
をゝめ家ぞ兄弟おや孝行の
だめ。なゝ。ぞ。れ。ぢよ

明治四十年一月二十日印刷
同　四十年一月廿五日　發行

版權所有

東京市牛込區新小川町二丁目十番地
訂正者　觀世清廉（電話番町三百十六番）
京都市二条通麩屋町角十二番戸
發行兼印刷者　檜常之助（特電話三五九七番）（振替貯金三五六八）